

「Chai(チャイ)」はスワヒリ語で、「お茶」を意味するが、隠れた意味として「わいろ」として使われることがある。「わいろ」や「汚職」の問題が援助する際の途上国の問題として、先進国が注目し始めてから久しい。

つまり、公職にあるものが、それを利用して個人の利益をを図ろうとする問題である。先進国の援助資金の中から政治家、政府の要人、権力者に流れてしまうお金を指す。2006年ドイツのNGO「トランスペアレンシー・インターナショナル」が行った調査によるとケニアでは年間12億ドルもの援助金が汚職によって喪失されていると報告している。

「わいろ」や「汚職」の問題は世界中どこにでも見られることで、もちろんケニアだけに限ったことではない。しかし、先ほどのドイツのNGOが世界の「200年度政治の透明度」をランク付けしたところ日本は17位、ケニアは142位という低さからケニアがいかに透明性にかけているかが分かる。この結果は、アフリカ諸国の中でも抜群の政治の不透明性であることが分かる。ちなみにアフリカの諸国の中では、ボツワナの37位で最高であった。

なぜアフリカ諸国はこんなにも「わいろ」や「汚職」にまみれているのだろうか？ その原因は、「失業率の高さ」の次に「給料の低さ」が挙げられると思う。特に公務員の給料は低いと言われている。部署やポストにもよるだろうが、大体が日本円にして1万円前後、公立高校の教師でも2万前後である。また企業勤めの人でも1万円以上もらっている人はほとんど居ないだろう。

その反面、政治家や政府の要人は桁違いの給料を得ているのである。それが給料だけでないことは、その暮らしぶりからでも良く分かる。それらの人々は、その地位、職権、ずば抜けた知性を私財に転用することに躍起になっているのをよく見聞きする。実際、メディアでも話題になった現職大臣による「アングロリーシング事件」「ゴールデンバーグ事件」等の汚職がらみのスキャンダルは氷山の一角

であるのだろう。

アフリカにはよく「中間層」がないと言われる。「富裕層」か「貧困層」であると言われる。それはやはりまるで「富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しく」という見えないレールが敷かれているような気がしてならない。そこにはやはり、「わいろ」や「汚職」による富の集中が確実に存在しているように思う。

アフリカに行く前は、そのような問題は一部の政治家の問題であって一般の人々には関係のない話であるだろうと思っていた。そしてまさか自分が「わいろ(小額の)」を日常的にするようになるとは想像していなかった。私のわいろの目的はささいな事柄のことであるが、金額と内容の問題ではなく、わいろはよくないことだ。しかし、ケニア暮らしも月日を重ねていくと、それはもう「悪いこと」ではなく、「必要悪」というか「生活するうえでの潤滑油」になってきて、あまりにも広く人々の社会のあらゆる場面で行われているのを見るうちに「罪悪感」は薄らいでしまっていた。

例えば、私はあるクリスマスも押し迫った日にある田舎町へ友人を訪ねることになっていた。スーツケースを抱え、公共の乗り物である「マタツ」乗り場に着いてみると、50名以上の人々が一台に数十人しか乗れない車を求めて並んでいるのが目に入ってきた。しばらく列の最後尾について並んでいたが、車の数以上に人の数はどんどん増えていく。

「このままでは、今日中に乗れないかもしれない」と直感的に思った。そんな私を察したのか、制服をきた一人のマタツ乗り場の職員が近寄って来た。「50シリング(日本円にして100円ほど)で、あなたと荷物の場所を次の車で用意出来る」と小さな声で言ってきた。これは、彼の職権を利用した「わいろ」の誘いである。頼んだのは私ではないが、同意すれば同罪だ。「迎えの人は時間には待ち合わせ場所に来ているのに」。日も落ちてくると外国人である私が、ここでスーツケース片手に乗り物を待つ

も危険な事であると思った。私は、運賃プラス50シリングを渡した。彼は視線を合わせずそれを受け取った。私は、生まれて初めて「わいろ」を渡した事になってしまった。彼は、黙って私のスーツケースを運び車に乗せ、私は列の一番前に並び、すぐに来た次の車に乗るように促された。

そして私は時間通りに到着し、無事移動することが出来た。たった100円を払えただけで、数時間の待ち時間を省略し、荷物さえ運んでもらい、彼には「ありがとう」と言われ感謝された。

また別の例を挙げると、私はあるデータを集めるために政府の統計局へ行った。受付で「外国人は紹介状がないと入れません」と頑なに拒否された。自分の勉強用の資料集めであったので、紹介状はなかった。私は、「誰でも入れると聞いて来ました。資料は自分の勉強用です。」と言った。そして私は聞いてみた。「いくらあればいいの?」「100シリングです(200円ほど)」。ケニアの暮らしが長くなると、その人が紹介状のあるなしを言っているのではなくて、お金を要求していることかどうかの区別は付くようになってきた。お金を渡し、受付名簿に名前を書くように言われる、そしてデータを集

めることができた。

駐車場の場所を確保する、図書館に入る、銀行の行列を飛ばす等、日常の些細なことの中に、「わいろ」は存在している。もちろん公金ではなく、自分のポケットマネーではあるが、職権を利用した行為に加担していることは悪いことだ。しかし、数十円から数百円で得られる利便性は私の良心をどんどん無くしていったように思う。

私は手放して、「わいろ」を要求する人たちを批判出来ない。不当に雇用されたり、低賃金で働かされたり、公務員は給料不払いが多い。彼らは、自分たちが贅沢したいために「わいろ」を要求していないことも良く分かる。家族思いな彼らだからこそ、少ない給料を補うように職権を利用して、ありとあらゆる方法で、日々小銭を集めようとしているのであり同情してしまう部分がある。しかし国が発展していくためには、やはりこういうやり方が日常である社会は健全ではないと思う。

もちろん「チャイ(紅茶)を飲む習慣」の方はずっと続いて欲しいと思うが。